

TZ 〈ほんの窓〉

第 37 号 (2015. 10. 1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

(※詳細情報を http://www.lib.hit-u.ac.jp/pr/reading/tz/html/tz_037.html に掲載していますので併せてご参照ください)

(※一橋大学附属図書館の請求記号を【 】内に記載しました。本学に所蔵のない資料も紹介していますが、公共図書館等で読むことができます。)

キュリー夫人からジェンダーまで

マリー・キュリーの伝記から

「わたしはばかだったし、今もばかだし、これからも一生ばかでしょう」¹⁾。ノーベル賞を2度も受賞した世界一有名な「リケジョ」²⁾ からそんなことを言われても当惑してしまいますが、これは、パリへ留学に旅立てるかどうかも未だおぼつかず、運がないものと半ばあきらめかけていた22歳のマリア・スクウォドフスカが姉に宛てた手紙の一節です。1920年代までは、ヨーロッパのほとんどの国で、女子は女子用の高校へ通い、そこで教育は終わりとされていました³⁾。フランスでも女性は大学の教授になることができず、アカデミーも会員に入れてくれませんでした⁴⁾。キュリー夫人(Maria Skłodowska-Curie 1867. 11. 7-1934. 7. 4)は放射性元素ポロニウム(帝政ロシアの支配下にあった祖国ポーランドにちなんで名付けた)とラジウムの発見者。第一次世界大戦中は第二の祖国フランスのために立ち上り4年間に20台のレントゲン車を作り野戦病院を駆け巡って200もの病院にX線装置を設置し百万人以上の負傷兵の治療に役立て、長女イレースを含む150人もの女性を放射線技師に養成しました⁵⁾。

- 1) Curie, Ève(1938). *Madame Curie*. エーブ・キュリー；河野万里子訳『キュリー夫人伝』新装版。白水社, 2014, p. 126 「〈マーニャよりブローニャへ(ワルシャワから) 一八九〇年三月十二日)」【2800:2360】
- 2) 川島慶子「科学者マリー・キュリーの「栄光」：ジェンダーと、放射能の「受容」をめぐる問題」『サイエンスネット』(数研出版) 第46号, p. 10-13 (2013. 5) <http://www.chart.co.jp/subject/rika/scnet/46/Snet46-3.pdf>
- 3) McGrayne, Sharon Bertsch(1993). *Nobel prize women in science*. シャロン・バーチュ・マグレイン；中村友子訳『お母さん、ノーベル賞をもらう：科学を愛した14人の素敵な生き方』工作舎, 1996, p. 11
- 4) 川島慶子「マリー・キュリーのキャリアに見るジェンダーと科学の問題」『女性学講演会』第16期, p. 21-50 (2013) <http://hdl.handle.net/10466/14521>
- 5) 斎藤美奈子『紅一点論：アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』筑摩書房, 2001 (ちくま文庫；[さ-13-2]), p. 256-280 「科学者の恋：マリー・スクロドフスカ・キュリー」より p. 267-268 【3670:1759】



決して真似してはいけません

キュリー夫妻は放射線の危険を過小評価し、結果的に周囲で大勢が健康を害してしまいました。日常生活でも鍋を火にかけたまま出勤するなど、ずいぶん危なっかしいことをしていました。

「でかける前に、マリーは物理学者の正確さで火を調節する。そうしてその火にまかせたなべに、不安げな^{いちべつ}一瞥を送ると、玄関のドアを閉め、階段を大急ぎでかけおり、待っていた夫といっしょに学校にむかう。」(前掲 エーブ・キュリー；河野万里子訳『キュリー夫人伝』, p. 211)

「ラジウムが人体に及ぼす危険性を自ら指摘していたにもかかわらず、マリーとピエールは枕元にラジウム塩の入ったガラス瓶を置き、美しい輝きを眺めながら眠った。」(Goldsmith, Barbara(2005). *Obsessive genius: the inner world of Marie Curie*. バーバラ・ゴールドスミス；竹内喜訳『マリー・キュリー：フラスコの中の闇と光』WAVE出版, 2007 (グレート・ディスクパリアーズ), p. 192)

「ピエール亡き後の長い時間を、マリーはろくな防御もなしに放射性物質を扱い続けます。それでも、当時としては若死にでもない六十六歳まで生きたのですから、やはりマリーは放射線に対する耐性が、普通の人よりずっと強かったのかもしれない。」(川島慶子『マリー・キュリーの挑戦：科学・ジェンダー・戦争』トランズビュー, 2010, p. 107) 【2800:1911】



Curie, Marie. *Pierre Curie*. With an introduction by Mrs. William Brown Meloney, and autobiographical notes by Marie Curie.

New York: Macmillan, 1923. M. キュリー；渡辺慧訳『ピエール・キュリー伝』白水社, 1959 【Qb:A49】

Curie, Marie(1923). "Autobiografia". マリー・キュリー；木村彰一訳「自伝」『世界ノンフィクション全集』第8巻。筑摩書房, 1960, p. 225-275 【PAe:126:8】 【030:6:8】

Joliot-Curie, Irène. "Marie Curie, ma mère". *Europe*. 32(108), p. 89-121 (décembre 1954)

イレース・キュリー；内山敏訳『わが母マリー・キュリーの思い出』筑摩書房, 1956 【346:167】

イレース・キュリー；内山敏訳『わが母マリー・キュリーの思い出』『世界ノンフィクション全集』第8巻。筑摩書房, 1960, p. 5-87

Quinn, Susan(1995). *Marie Curie: a life*. スーザン・クイン；田中京子訳『マリー・キュリー』1:2。みすず書房, 1999

Loriot, Noëlle(1991). *Irène Joliot-Curie*. ノエル・ロリオ；伊藤力司, 伊藤道子訳『イレース・ジョリオ=キュリー：1897-1956』共同通信社, 1994

Schiebinger, Londa L. (1989). *The mind has no sex?: women in the origins of modern science*. ロンダ・シーピンガー；小川眞里子, 藤岡伸子, 家田貴子訳『科学史から消された女性たち：アカデミー下の知と創造性』工作舎, 1992 【4000:171】

放射線研究の原点とジェンダー

東日本大震災の原発事故、原爆投下を経験した現代日本において、制御できない力を解放してしまった放射線科学、原子物理学の原点を振り返る、金銭的利益に無頓着な清貧の科学者、聖者のような偉人伝、ゴシップ報道、押し寄せるマスコミ取材、戦争、愛国心、家事・子育てと仕事の両立、等々、マリー・キュリーとその周囲の人々の波瀾万丈の人生は、いろいろなことを多面的に考えさせてくれます。夫婦別姓・再婚禁止期間に対する最高裁の憲法判断や「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」等も報道される昨今です。ジェンダー、性同一性障害、男女共同参画、同性結婚、フェミニズム等も身近な話題になってきました。男女の体格差は事実として存在し、スポーツ競技は男女別が一般的ですが、知的競技や日常生活や仕事でも、実力差や役割分担に科学的な合理性はあるのでしょうか？ 生物学や文芸作品の事例にも目を向けてみましょう。

<自然科学、生物学>

桑村哲生『性転換する魚たち：サンゴ礁の海から』岩波書店，2004（岩波新書；新赤版 909）【0800:33:新赤 909】

桑村哲生『子育てする魚たち：性役割の起源を探る』海游舎，2007【4800:161】

長谷川真理子『雄と雌の数をめぐる不思議』NTT出版，1996【4800:72】

Caplan, Paula J.; Caplan, Jeremy B. (2009). *Thinking critically about research on sex and gender*. 3rd ed. ポーラ・J・カプラン, ジェレミー・B・カプラン著；森永康子訳『認知や行動に性差はあるのか：科学的研究を批判的に読み解く』北大路書房，2010【1400:1360】

Fausto-Sterling, Anne(1985). *Myths of gender: biological theories about women and men*. アン・ファウスト・スターリング著；池上千寿子, 根岸悦子訳『ジェンダーの神話：「性差の科学」の偏見とトリック』工作舎，1990【4900:1567】

<文芸作品>

稲賀敬二校注・訳「虫めづる姫君」『落窪物語；堤中納言物語』小学館，2000（新編日本古典文学全集；17），p.405-420【9180:173:17】

国東文麿全訳注『今昔物語集』5. 講談社，1981（講談社学術文庫；[309]），p.23-50 巻5「僧迦羅・五百人の商人、共に羅刹国に至る語」第1【0800:34:309】

小林保治，増古和子校注・訳『宇治拾遺物語』小学館，1996（新編日本古典文学全集；50），p.216-223 巻第6「僧伽多羅刹国に行く事」第9；p.407-409 巻第13「大井光遠の妹強力の事」第6【9180:173:50】

馬淵和夫，国東文麿，稲垣泰一校注・訳『今昔物語集』3. 小学館，2001（新編日本古典文学全集；37），p.233-237 巻第23「相撲人大井光遠妹強力語」第24【9180:173:37】

篠田節子『静かな黄昏の国』[新装版]. KADOKAWA, 2012（角川文庫）【9100:2647】

篠田節子『百年の恋』朝日新聞社，2003（朝日文庫）【9100:2654】

筒井康隆『笑うな』新潮社，1980（新潮文庫），p.63-71「屍墟」，p.151-162「トーチカ」，p.187-199「産気」

Butler, Octavia E. (1984). "Bloodchild". オクティヴィア・バトラー；小野田和子訳『血をわけた子供』小川隆，山岸真編『80年代SF傑作選』下. 早川書房，1992（ハヤカワ文庫SF），p.261-301【9300:1797:下】

Dick, Philip K. (1964). "Oh, to be a Blobel!" 浅倉久志訳『おお！ブローベルとなりて』フィリップ・K・ディック；大森望編『アジャストメント』早川書房，2011（ハヤカワ文庫SF・ディック短篇傑作選），p.176-216【9300:1789】

Smith, Cordwainer(1964). "The crime and the glory of commander Suzdal". 伊藤典夫訳「スズダル中佐の犯罪と栄光」コードウェイナー・スミス；伊藤典夫，浅倉久志訳『鼠と竜のゲーム』早川書房，1982（ハヤカワ文庫SF・人類補完機構），p.169-196【9300:1798】

Tiptree, James, Jr. (1975). *Warm worlds and otherwise*. ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア；伊藤典夫，浅倉久志訳『愛はさだめ、さだめは死』17刷. 早川書房，2012（ハヤカワ文庫SF）【9300:1803】

Tiptree, James, Jr. (1976). "Houston, Houston, do you read?". 友枝康子訳「ヒューストン、ヒューストン、聞こえるか？」ジェイムズ・ティプトリー・Jr.；友枝康子訳『老いたる霊長類の星への賛歌』サンリオ，1986（サンリオSF文庫），p.254-345【232:958】

Varley, John(1977). *The Ophiuchi hotline*. ジョン・ヴァーレイ；浅倉久志訳『へびつかい座ホットライン』早川書房，1986（ハヤカワ文庫SF）【9300:1783】

ジョン・ヴァーレイ；浅倉久志『ほか』訳『逆行の夏：ジョン・ヴァーレイ傑作選』早川書房，2015（ハヤカワ文庫SF）【9300:1790】

<人文社会科学、日本語学>

井筒三郎『おまえなしには生きられない。おまえとともに、また……。』(ことばの憑依体；15)『翻訳の世界』9(6)，p.80-81（1984.6）【ZP:186】

伊藤公雄，牟田和恵編『ジェンダーで学ぶ社会学』新版. 世界思想社，2006【3670:1097】

上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房，2001【3610:1776】

大岩川嫩『日本：いま歴史の節目にたつ、わたしたちの名前』。アジア経済研究所企画；松本脩作，大岩川嫩編『第三世界の姓名：人の名前と文化』明石書店，1994，p.385-410【2800:77】

木村涼子，伊田久美子，熊安貴美江編著『よくわかるジェンダー・スタディーズ：人文社会科学から自然科学まで』ミネルヴァ書房，2013（やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ）【3670:1678】

木本喜美子，貴堂嘉之編；赤石憲昭〔ほか著〕『ジェンダーと社会：男性史・軍隊・セクシュアリティ』旬報社，2010（一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究叢書；5）【3670:1449】

斎藤美奈子『モダンガール論：女の子には出世の道が二つある』マガジンハウス，2000【3670:862】

佐藤文香『軍事組織とジェンダー：自衛隊の女性たち』慶應義塾大学出版会，2004【3670:1012】

橋木俊詔『女性と学歴：女子高等教育の歩みと行方』勁草書房，2011【3700:4062】

中村桃子『「性」と日本語：ことばがつくる女と男』日本放送出版協会，2007（NHKブックス；1096）【8000:624】

中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社，2010【8000:754】

中村桃子『女ことばと日本語』岩波書店，2012（岩波新書；新赤版1382）【0800:33:新赤1382】

柳下み咲，山田敏之「各国の夫婦の姓についての法」『外国の立法』31(4)，p.95-119（1992.9）【ZM:101】

若桑みどり『戦争がつくる女性像：第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房，1995【3670:651】
『ジェンダーがわかる。』朝日新聞社，2002（AERA Mook；78）【3670:981】

